

野間宏「崩解感覚」論

——九段界限の彷徨シーンを中心に——

野中 潤

一、はじめに

野間宏の「崩解感覚」は、昭和二十三年の一月から三月まで『世界評論』に連載された初出時の表記に従えば、「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」の三つの場面に分かれている。

「Ⅰ」は、恋人の西原志津子との待ち合わせの場所へ向かおうと部屋を出た及川隆一が、下宿の主婦に呼び止められ、自室で縊死した荒井幸夫の死体と対峙する場面である。学徒出陣して復員した沼津の旅館の息子で、大学の法学部に通っていた荒井幸夫は、「分厚い法律書」を踏み台にして自室で縊れたことになっている。もちろん「分厚い法律書」とは、昭和二十一年十一月の日本国憲法公布に始まる日本の法体系の大きかりな解体再構築の中で、まさに過去の遺物と化してしまった大日本帝国憲法下の諸法規の象徴であり、「荒井大学生」の過去のメタファーである。荒井幸夫の死体が宙吊りになっている部屋の窓から「晴れた自由な青い空」が見えるというアイロニツクな構図の中

には、GHQ主導の戦後改革を相対化する眼差しも感じられるだろう。さらに戦場での過酷な過去の体験も示唆されていて、荒井幸夫の死は、(過去)に由来するトラウマと、現在進行形の(戦後)に押しつぶされた、広義の(戦死)と言ってよい。しかもこの場面は、死者と向きあう生者が描かれているという点で、自室に安置された荒井幸夫の遺体に及川隆一が形ばかりの「拝礼」を捧げる「Ⅲ」と対になっている。

「Ⅱ」は、約束の時間を三十分以上過ぎて下宿を出た及川隆一が、待ち合わせ場所の飯田橋駅で西原志津子の姿を見つけることができないうまま、行き場をなくした肉欲を抱えて当て所もなく九段界限を彷徨する場面である。

「Ⅲ」は、下宿に戻った及川隆一が、仰臥する荒井幸夫の遺体を前に形ばかりの拝礼を捧げたあと、自室に戻って身体を横たえ、自らの内部知覚と向き合う場面である。

これら三つの場面によつて構成されている「崩解感覚」は、これまで哲学的なタームを用いた言説にからめとられて論じられることが多かった。たとえば、「たえず現在する過去に緊縛された人間の生存の実

相を、……新心理主義文学に寄り添うだけでなしに、……”内臓感覚”をもつて、前人未踏の表現世界を出現……”(1)とか、「……」
屈曲した表現によつて仮構された内部感覚は、……自我や身体を支え、作り上げている存在の原形質の世界をのぞいたような感触を抱かせる……”(2)といったような表現がその典型である。「フロイド流の意識の流れ」(3)を指摘した杉浦民平や、「腎臓や膀胱のあたりでものを考えた小説」(4)と述べた本多秋五などの「崩壊感覚」論も同工異曲であると言えるだろう。このような身体論的もしくは実存主義的な言説による「鑑賞Ⅱ研究」は、じつはテキストの言葉と向き合つて及川隆一の意識なり身体なりのありようを具体的に分析する作業を等閑視したものである。(「意識」を論ずるにせよ、「身体」を論ずるにせよ、小説言語が表現している具体的な相を丹念に再構成しない限り、文学をダシに使つただけの抽象的で空疎な議論に終始せざるを得ないのだ。

本稿は、九段界限を彷徨う及川隆一を描いた「Ⅱ」の部分の詳細に検討することで、『近代文学』同人だった本多秋五や埴谷雄高など、野間宏周辺の読者によつて成立し、実存主義や身体論などの言説を組み込みながら今日にいたるまで再生産され続けてきた従来の「崩壊感覚」の読みを、ドラスティックに組み替え、「崩壊感覚」に描かれた(「意識」や「身体」の問題を小説言語の具体的な相の中で再検証する)試みである。

二、靖国神社の見える場所

荒井幸夫の死体から解放され、約束の時刻を三十分も過ぎてから下宿を出た及川隆一は、何とか飯田橋駅にたどり着く。しかし「橋のたもとにはすっかり夕暮の色が降りていて、西原志津子の姿はすでになかった。駅前のロータリーの前にしばし佇んだ及川隆一は、やがて何かに導かれるかのように「省線のガード」をくぐり、どこへ向かうともなく歩き始める。この場面で及川隆一が彷徨する都市空間は、「崩壊感覚」という小説の読みを生成させる上で、無視し得ない力を読者に及ぼすトポスとなつている。手榴弾で自殺を図つたものの、「兵役忌避」のために故意に指を落としたと疑われ、転属を命じられて結局戦争を生き延びてしまった及川隆一がたどつた道筋を、固有名を拾い出しながらざつと追跡しておこう。

駅前のロータリーで「飯田橋公共職業安定所」の白い案内柱の墨字を読みながら、交差点の上の架空線の網の目にまなざしを向け、坂道を降りてくる都電を視野に収めた及川隆一は、わき上がつてきた「ぬらぬらした自己の崩壊感」から逃れるように、「省線のガード」をくぐり、「富士見町」の方に坂道を上っていく。で「(ぼ)このある悪い道」を歩いていくと、「富士見町教会の高い尖塔」が見える。さらに進んで教会のある交差点まで行くと、「自分の体が、何者かの手で左手の方に強くひっぱられる」のを感じる。及川隆一が意識しているのは、「(こ)を左へ曲がると「米久の肉屋」があり、志津子の家の方に行けるといふことである。ところが富士見町教会がある牛込見附の交差点を左へ進むとい

うことは、実は靖国神社の参道の方向に進むということでもあるのだ。しかし小説中の及川隆一は、「左手の方に引っぱられる自分の体に抗って」まっすぐに道を進み、「通信博物館」「月曜書房」「通信病院」「法政大学」などのランドマークを認知しながら、堀端の道を歩き続け、「三輪田高女」の門の前まで行く。そして「三輪田高女」のある新見附の交差点でようやく左手に進路を変え、「一口坂停留場」の前に出る「九段三丁目の上り坂」を「牛込電話局」のあたりまでふらふらと歩いていくのである。ここまでの描写は、及川隆一の遊歩する速度に合わせた情景法的なものになっている。しかしなぜか描写は一口坂の交差点の手前で途絶している。「II」の彷徨シーンは、「及川隆一が、疲れてというよりもその疲労を自分のものにして下宿にかえりついたのは、十時を過ぎてしまっていた。」という記述で唐突に終わっているのである。

この九段界隈の彷徨シーンにおいて、特に富士見町の坂道を上り始めてからの都市空間には、さしあたり以下のような問題を見て取ることができるとらう。

まず大雑把に問題の所在を言っておけば、一連の都市空間は、元陸軍兵士の及川隆一の意識と身体に働きかけてくるような土地の記憶や固有名に満ちた、特異な空間であるということだ。及川隆一は元陸軍兵士である。したがって元陸軍兵士として九段界隈を彷徨する及川隆一には、〈行軍する身体の記憶〉が刻み込まれている。九段界隈をふらふらと歩いたあと、午後十時過ぎにお茶の水の下宿にたどり着いたということは、この日の夕刻以降、おそらく三時間から四時間にわたって、あてもなく歩き続けたことになる。距離にして十数キロにはな

るだろう。交通機関が発達した現代人の感覚からすると想像しにくいことだが、重装備で一日に数十キロを行軍するような経験をしてきたはずの元陸軍兵士にとつて、装備なしで町なかを三、四時間歩くことは、肉体的には苦もないことだったにちがいない。問題は、〈行軍する身体の記憶〉を持つ及川隆一が、九段界隈の空間的布置をどのように感受していたかということだ。小説中に「はるか下方に暮れ残った見附の堀にポートが浮んでいた」という描写があるが、及川隆一がたどる堀の道にある「牛込見附」や「新見附」とは、言うまでもなく江戸城三十六見附の「見附」であり、外敵に備えて番兵をおく施設である。つまり及川隆一が歩いている空間には、「城」という戦略的に構築された建造物の記憶が刻み込まれていることになる。当然のことながら、外堀に面した「牛込見附」「新見附」は、その機能に適した高所にあり、堀端の道を歩く及川隆一の右側には広大な空間が広がっている。視界の広がり、土地の起伏、立木や水などの地勢的な情報は、陸軍兵士にとつては生死にかかわる重要なものである。ビルに囲まれた都市空間を歩く現代人が、せいぜい数メートル四方の身体感覚に基づいて空間移動するのに比べ、めばしい建物がなくなった焼け野原を歩く元陸軍兵士は、圧倒的に大きな空間を認知する身体感覚をもっていたはずだ。したがって、九段界隈を彷徨する及川隆一の意識が、手近な建築物だけに向けられていたとは考えにくい。

まず、見附のある見晴らしのよい場所からまなざす者として、外堀側の空間の広がり意識を向けていたに違いない。「見附」から「見る」者、つまり戦場の論理としては強者の位置に立つ自分を感受していた

に違いないのだ。及川隆一は沈みゆく夕陽を見ただろうか。あるいは、焼け野原に残されたランドマークのいくつかを視野におさめただろうか。ひとつだけはつきりしているのは、先ほど触れた「はるか下方に暮れ残った見附の堀にボートが浮んでいた」という記述のあとに、「堀の向こうの建築場から、たーん、たーんという規則的な槌の音がきこえて、及川隆一の心の中のほのかな痛みをうちつける」という記述があることだ。この部分は、上つてきた富士見町の坂道に続く道から、一段高くなった堀端の堤の上の小径に出た直後の描写で、つき出した松の枝の間から空気が透けて「視界が開けた直後、つまり自分の身体を見晴らしの良い場所にさらした直後の及川隆一の意識のありようを伝える場面である。この場面には、元陸軍兵士としての意識が色濃く表出させていると言えるだろう。なぜなら、自らの身体を視界が開けた場所に進めた元陸軍兵士が、過去の戦場体験につながる「たーん、たーん」という銃声に似た音に反応している場面だと考えられるからだ。

さらに、外堀側の空間とは逆に、及川隆一の立つ場所の左手はじつは高台になつている。つまり、右側の空間との関係とは逆に、左側の空間を意識したときの及川隆一は、一方的にまなざしを受けているかもしれない。戦略的には弱者の立場にある自分を感じ受けることになる。教会の前まで出たときに「何者かの手で左手の方に引っぱられ」たのだが、まさにその「何者か」がいる方向が、及川隆一のいる場所をまなざす場所であり、相対的に高台になつている場所なのである。

その場所には、先ほども触れたように、大村益次郎が高燥の良地を選んで建立した「東京招魂社」、つまり「靖国神社」がある。堀端の道を

歩く及川隆一の視界に、「戦友が眠る靖国神社がある」ということは、これまで全く注目されてこなかった。しかし、作中人物とともに都市空間を追体験し得る読者にとつて、決して無視し得ない場所であることは明らかだろう。「靖国神社」は直接語られることはないし、歩き続ける及川隆一がランドマークとして認知したことを間接的に示す記述すらない。しかし、戦略的に重要な「高燥の良地」の角角を、元陸軍兵士が意識しなかったとは考えにくい。また及川隆一が意識する「九段」という地名は、「九段の母」という言葉に明らかになように「靖国神社」の代名詞である。しかも、「II」の終わり近くで及川隆一が立ち止まった九段三丁目の坂道にある牛込電話局の角は、靖国神社の裏門まで七、八十メートルしかない場所なのだ。したがって、ガード下から次第に高台へと上つていく道筋の最後にある「九段三丁目の坂道」とは、及川隆一にとつて「九段参丁目の坂道」だったとさえ言える。

野間宏が昭和二十一年から翌年にかけて住んだ学生会館(学徒会館)は、九段下から田安門を入った代官町にあった。元は近衛師団司令部などがあつた場所で、現在は日本武道館が建てられている一角である。周知の通り靖国神社はこの一角に接している。つまり及川隆一が歩いたコースは、野間宏が実際に何度も歩いた場所だったと推測できるのだ。また、この場面で及川隆一が認知する「月曜書房」は、埴谷雄高の「持統者・野間宏」⁽⁵⁾によれば、岡本太郎や花田清輝が中心となつて結成され、野間宏も参加した「夜の会」の第一回会合が行われた場所であるという。埴谷雄高は、その中で次のように述べている。

『崩解感覚』の場合、緻密に描き出されるのは、恋人とつねに会っている場所、東京の市ヶ谷寄りの飯田橋駅の附近である。ところで、野間宏がこのあたりをこれほど仔細に歩いていたのかと私が感銘するのは、私達がその頃よく訪れていた前田隆治の邸宅、その二階が月曜書房の最初の事務所となつた場所の付近をも、主人公が細密に歩いていることである。

「夜の会」のメンバーの一人だった佐々木基一は、「九段の濠の内側の焼け残つた建物に彼を訪ねて行つたときはよく憶えている」とも書いていて⑥、『近代文学』周辺の文学者たちが「散歩者野間宏」（埴谷雄高）と付近を歩きながら語り合つた可能性を指摘することもできる。したがつて野間宏も、周辺にいた同時代の文学者たちの多くも、及川隆一の歩いた空間の間に靖国神社があることなどは百も承知のはずなのだ。にもかかわらず、「崩解感覚」を論ずる『近代文学』同人たちが「靖国神社」の問題に触れることは、これまで全くなかった。もう一つ、及川隆一および読者の潜在意識に働きかけるものとして、ランドマークとして認知された建物の固有名をあげることができ。敗戦直後に米国陸軍によって撮影された空中写真をもとに作成され、焼け残つた建物が丁寧に書き込まれている当時の地図⑦によると、九段界限にはめばしい建物はあまり残っていない。わずかに残つた建築物の中で、いくつものものは、及川隆一の意識によつて固有名とともに認知されているのだが、それらの固有名が惹起する言葉のざわめきは、及川隆一の潜在意識を強く揺さぶるものである。たとえば、

「通信博物館」や「通信病院」は、「挺身」という言葉と連合関係を形成し、「三輪田高女」という固有名を巻き込みながら、女子挺身隊のイメージを喚起する。また「富士見町教会の高い尖塔」は、「天国」か、神への憧れか？という思いを及川隆一の意識にのぼらせつつも、聴覚映像としては「不死身」「境界」「他界」「戦闘」といった言葉と連合関係を形成する。さらに「法政大学」は「ほうせい」という聴覚映像を仲立ちとして「砲声」という語を喚起させる。「一口坂」を「人朽ち土に反える」と解説することすら可能である。象徴詩の書き手でもあつた野間宏の小説言語に導入されたこれらの固有名の意味は、もう少し注意を払われていい。また、吊り下げられた肉塊のイメージを媒介として、「米久の肉屋」が荒井幸夫の縊死体とイメージ上の連関を生成することまで考えれば、「靖国神社」を持ち出す前に、既に及川隆一の潜在意識（あるいは内包された読者の意識）は、戦争や死の記憶につながる言葉たちのざわめきによつて揺さぶられ続けていると言えらるだろう。ついでにもう一つ付け加えれば、いくぶん唐突に言及される「男爵前島密の立像や、その前にならんだ三つの胸像」は、昭和二十二年三月に設置された、忠霊塔忠魂碑等の撤去審査委員会の決定にしたがつて行われた銅像撤去を想起させるものだ。「崩解感覚」発表前年の七月に撤去された神田万世橋の「軍神廣瀬中佐像」をはじめ、麴町の「東郷元帥胸像」や九段の「尼港殉難之碑」など、多くの銅像や記念碑が撤去された一方で、靖国神社のシンボルとも言える「大村益次郎像」や日露戦争で満州軍総司令官をつとめた陸軍大将「大山巖像」、「品川彌二郎」像などは残された。銅像の中の生き残り組であるとい

う意味合いにおいて「前島密像」は、「大村益次郎像」と等置しうる表象である。つまり、赤紙召集を支えた通信システムを構築した過去の偉人たちの銅像が戦後の時空に屹立するさまは、靖国神社という存在のありようそのものを象徴していると言えるのである。

三、西原志津子という女

及川隆一が歩いた九段界限は、靖国神社という元陸軍兵士にとつて特別な場所を焦点とする空間であるとともに、西原志津子との性愛空間でもある。堤の上の小径から九段三丁目の坂道へと歩き続ける及川隆一の意識は、道端のランドマークを認知しながら道筋をたどる知覚的な表象と、西原志津子との逢瀬を重ねる過去の記憶によって二重化されている。しかも、靖国神社に象徴される戦争の記憶は、言わば潜在意識の中に抑圧されていて、顕在化することがないままに及川隆一の身体をゆさぶる。たとえば、富士見教会のある牛込見附の交差点のところで、志津子の家がある方角、別の言い方をすれば靖国神社の大村益次郎像の方角からの力を感じながら歩き続ける場面は、次のように描写されていた。

…彼は、左手の方に引っぱられる自分の身体に抗って真直ぐに道をとおり、通信博物館の右手の方に出て行った。

道を右手にとつたとは言え、この辺りの景物の一つ一つには、志津子の息や、紅の色や、ストッキングや、汗のういた掌の体温が、附着しているのである。この博物館の前庭から通りを見下している男爵

前島密の立像や、その前にならんだ三つの胸像が、くらい闇の中にくろくろとしまっているのを左手にして、彼の腕に腕をおしてくる志津子のなすにまかせて、彼はこの夏、たびたびこの道をおりすぎた。もつとも、腕を組むなどということは、すでに彼としてはできがたいことではあったのだが。彼はただ、この道の先に広がる焼跡のくさむらで、志津子の押しつけてくる顔の手ざわりを得ることを考えて、体をふくらせ、歩いて行くのだった。勿論、志津子から得るものと言つては、その肌のもつ、あの弾力以外に何があるか。彼の意識が対象から解放されるあの柔らかい没入以外に何があるか。それは志津子としても、同様である。この二人の人間の結び目は、ただ肉体であるのだから。二人の心は、その心の奥底でふれ合わない。むしろ二人の胸は、厚い隔膜でへだてられているのである。

この場面から明らかなのは、「この辺り」の空間は、及川隆一にとつて、靖国神社の周辺であるにもかかわらず、むしろ性愛空間として意識されているということだ。井上章二が『愛の空間』で明らかにしたように⁽⁸⁾、焼け野原に生きる戦後日本人の性愛は、野外で行われることが珍しくなかった。たとえば、「有楽町のガード下」に象徴されるパンガールを相手にするための性愛空間として米軍兵士たちが使い始めた皇居前広場などは、またたく間に野外性交の名所となり、やがて日本人同士のカッパルも大勢押しかけるようになったという。しかも、性愛空間として使われたのは、皇居前広場のような特別な空間だけではなく、小さな空地や公園、神社の拝殿や学校の教室などにも及

んだらしい。戦後の都市空間においては、「木陰のある空地は、どこでも性愛用に供される可能性」があったのだ。したがって、九段界限を歩きながら及川隆一が想起するのは、端的に言って西原志津子との野外性交の記憶に他ならない。それにしても、自宅近くの野外で男を誘う西原志津子という女は、いったい何者なのか。

そして及川隆一は自分が志津子を求めているのを感じる。その向うの長い赤煉瓦の上にかつて志津子と一緒に並んで腰掛けたとき、向うの土蔵の切取ったような四角の窓の燈が見え、一面に虫がなき、草の青くさい匂いがとりまいた。と、彼の足下で、志津子の白い靴が雑草をふみつけ彼の手をのせていた彼女の手の平がそのままとざされ、彼女の混合香料の刺激的な匂いの発する白い顔が近づいてきた。及川隆一は自分の触覚が、その志津子のなめらかな弾力をもとめているのを感じる。

この場面に出て来る「白い靴」や「混合香料」だけでなく、「黒系統のべの色」「ストッキング」「あらい碁盤縞のハーフコート」「純白のフラーノのスカート」などに彩られた西川志津子のイメージは、官能的である。ヤミ米を買うことを忌避し、餓死した判事が紙面をにぎわしていたこの時代にあつて、その着飾りぶりはかなり人目を引くものであつたに違いない。靖国神社の大村益次郎像を望む九段下にある書店で初めて出会ったときに、及川隆一が西原志津子の眼に「肉欲的な呼応」を感じたのも、衣服と化粧によつて加工された彼女の身体のたたずまいが何らかの影響を与えていたに違いないと想像させられる。「何かの輸入

映画の一シーンのヒロインの姿態をまねたポーズを好み、「アイム・サリ」という怪しげな英語を使うことといい、「飴屋とリンゴ屋の屋台が店を並べている」「飯田橋のガード下」で待つ姿が、及川隆一によつて想起されることといい、性を売り物にして戦後の厳しい時代を生き抜こうとする女性の一人であることを印象づけるような描写が目立つ。決定的なのは、「銀座を歩くことに喜びをかんじ、週に二回は数寄屋橋を渡らなければならぬ女」と書かれていることである。接収された第一生命ビルがGHQ本部になったために、銀座一帯が米兵たちの歓楽街となったことはよく知られている。皇居前広場が野外性交の名所になったのも、GHQ本部が近くにあるという地理的条件によるところが大きい。不特定多数の男性を相手にする「パン・パンガール」も、高級将校の現地妻である「オンリー」も、銀座・有楽町界限を、生きていくための主要な舞台としていたはずだ。だとすれば、「銀座を歩くことに喜び」を感じる西原志津子が、「週に二回は数寄屋橋を渡らなければならぬ」というのは、「オンリー」として米軍の高級将校に会わなくてはならない」ということの婉曲的な表現に他ならない。

「或る程度の教養をもった女」でありながら、「すでに過去に数人の男と肉体関係を経験し、生きるためにアメリカ人に体を売っているかもしれない西原志津子と、元陸軍兵士及川隆一との関係は、心の奥底でふれ合うこともなく、ただ肉体のみで結ばれている殺伐としたものに過ぎない。そこには、戦後を生きる日本人の、奇妙にねじれたアメリカ人との関係が、象徴的に表されているとも考えられる。しかも、氏から推測しうる西原志津子の出自は、二人の関係をいつそうアイロ

ニツクなものに感じさせる。つまり、「西原」は代表的な創氏の一つであり、志津子の家族が朝鮮半島の人々であることを示唆するからだ。創氏改名政策によって生まれた氏には、金氏が名乗った「金本」や「金原」などのように元の文字を一部に使ったもの他に、祖先が井戸から生まれたという伝説をもとにした朴氏の「新井」のようなものもあった。「西原」という氏も、「清州」が昔「西原小京」と呼ばれていたことになみ、清州韓氏が名乗ったものであることが知られている。現在の韓国において清州韓氏は、金海金氏や「密陽朴氏」などには到底およびないものの、姓氏本貫別の人口で言うと、十指に入る多数派である。戦後の日本に暮らし続けることになった朝鮮半島の人々のうち、「西原」という氏の人々が決して珍しくはなかったことが推測できるだろう。現在よりも出自に関する差別意識が強かった時代の読者であれば、「西原志津子」という名が創氏改名によってつけられたものであると考える者がいてもおかしくない。そうなつてくると、及川隆一と西原志津子との関係は、男女関係という次元を超えたものであり、〈戦後〉という時空の歪みやねじれを内包した寓話的な関係だとさえ言わなければならぬだろう。

四、死者たちの都市空間

それにしても、兵役忌避を疑われて生き延びた元陸軍兵士及川隆一が、「英霊」の祀られている靖国神社を間近に感じる空間で、〈西原志津子という女〉と性的な関係を結ぶという構図の奇怪さには、改め

て目を眩らざるを得ない。小説中で及川隆一が何度も〈崩解感覚〉に襲われるのも、当然のことだろう。そこでは、何かが崩れているというよりも、何もかもが〈崩解〉しているのだ。とりわけ、富士見町の坂道を上り始める前に、飯田橋駅前のロータリーで〈崩解感覚〉に襲われる場面は、注目に値する。靖国神社という死者たちの空間に及川隆一と西原志津子という生者を対置するという前述の場面の構図より、もずつと大がかりな形で、〈戦後〉という時空の奇怪さを映し出すものとなつているからだ。

及川隆一が約束の時刻に遅れて到着したために、飯田橋駅前の視界の中には、「この風景の焦点となる、特別の支点、志津子」が存在しない。「特別の支点」を喪失してしまった及川隆一は、「赤く焼けて長く横に引いた幾すじもの西の空の雲の波」を眺め、「飯田橋公共職業安定所」の「白い案内柱の墨字」を読み、「網の目を拡げている交叉点の上の架空線の入りみだれた太い蜘蛛の巣」を見つめる。遠く一筋の上つていく坂の上からは、架空線の網の目をくぐるようにして都電の小さな車体が下りてくる。そのとき、及川隆一の胸を、「何か堪えがたいものがとおりすぎ」ていく。

と眼の前に拡げていた架空線の網の目が、突然その太い触手をめらぬらと動かし始めた。ぬらぬらと、幾本も交りあったその針金の手を動かして、それが彼の方に向つてやつてくる。いやだ、いやだ、いやだ、いやだと彼は自分に抵抗しながら体の深みで言った。と、彼の眼の前がぱつと黒くなったかと思うと、彼の身体の上にあの手榴弾

の爆裂した瞬間の、ぐにやりとした感覚、意識と体液とが混合したようなねばねばした瞬間がおそいかかってきた。そして架空線の網の目は、既の後の闇の中で彼のくらい視界にうつし出されたあの自分の眼球の中の白血球の数珠玉の網の目に変わり……ぐにやりとした内部感覚、空中へふき上げられる自己意識。

及川隆一の意識が「飯田橋公共職業安定所」の「白い案内柱の墨字」という点景をとらえたということだけでも、十分に象徴的である。昭和二十二年四月に設置されたばかりの「公共職業安定所」は、旧砲兵工廠の一角にあり、じつは復員兵たちの社会復帰のために作られたものだ。真新しい墨字の中には、挙国一致の戦時体制から占領下の民主主義へと転換した国家と、時代の流れに翻弄されざるを得ない個人、アイヒツクにねじれた関係が象徴されている。

また、西原志津子という焦点を失って、「ぬらぬら」と触手を動かし始める「架空線の網の目」が象徴するものは、よりいっそうは複雑で奇怪なねじれをはらんだものだ。

「蜘蛛」ならぬ「雲」の「赤く焼けて長く横に幾すじもの」波は、「西の空」にある。複数の路線が交錯する交通の要衝、飯田橋の架空線を南西にたどると、そこには都電の「市ヶ谷見附」駅がある。「都電の小さな車体」が坂道を下りてくるというのも、その方角である。飯田橋で交錯する複数の路線のうち、都電が走る見通しのいい直線の坂道という、市ヶ谷方面しかないからだ。また、「市ヶ谷見附」の北側には、元は陸軍士官学校だった極東国際軍事裁判所がある。及川隆一の立っ

る位置からすると、西南西の方角に当たり、「赤く焼けて長く横に引いた幾すじもの西の空の雲」とは、極東国際軍事裁判所上空の風景に他ならない。昭和二十一年一月に元大牟田俘虜收容所の由利敬大尉に絞首刑判決が下され、三ヶ月後に「巢鴨ブリズン」死刑囚第一号として処刑されて以来、多くのB級戦犯が絞首刑に処せられている。

昭和二十一年五月に極東国際軍事裁判が開廷されると、B級戦犯に関する新聞報道は減るが、「戦争の責任」を問われた者たちに「戦争に起因する死」を与える営みが「自由な青い空」の下で粛々と続けられていることを、復員兵の及川隆一も知っていたに違いない。したがって、この場面は、手榴弾によって自殺を図り兵役忌避の嫌疑をかけられて生き延びた者が、戦後の裁きを免れつつ、今まさに裁かれつつある者たちに対峙する場面であるとも言えるのだ。

それだけではない。「交叉点の上の架空線の入りみだれた太い蜘蛛の巣」は、自殺未遂体験によるトラウマを持つ復員兵の及川隆一に働きかけるいくつかの特異な空間へと続いている。

まず、新宿を起点とする十三系統の都電の架空線を万世橋方向へたどれば⁽⁹⁾、水道橋を経てお茶の水へと続いており、そこには戦犯たちと同じように縊れて生を閉じた荒井幸夫の死体がある。「ダズ・バイ・ハンギング」という戦犯たちへの判決の言葉を媒介として、広義の戦死とも言える二つの死は結び、飯田橋に佇む及川隆一を揺さぶる横軸を構成するのである。

また、早稲田を起点とする十五系統の架空線は及川隆一の背後で省線のガードをくぐり、西原志津子との出会いの舞台となった書店が

ある「九段下」へと続いている。「九段下」が、坂の上に大村益次郎像を
仰ぎ見る場所で、「靖国神社」の参拝口であることは周知の通りだ。

十五系統を「九段下」とは逆の方向へたどると、「江戸川橋」へと続い
ている。十五系統は「江戸川橋」で左へと折れるが、二十系統に乗り換
えて真つ直ぐに進めば「護国寺前」に至る。明治の元勳も眠る護国寺
には「陸軍埋葬地」があり、その両隣は皇族が埋葬されている「豊島岡
墓地」と、夏目漱石や泉鏡花などの著名人や一般の庶民が眠る雑司
ヶ谷墓地になつている。雑司ヶ谷墓地には、戦災で亡くなった「無辜の
民」も埋葬されているはずである。つまり、「英霊の御霊」を「招魂」し
「合祀」する場所としての靖国神社と、埋葬地としての死者たちの空
間が、飯田橋に行む及川隆一を揺さぶる縦軸を構成しているのだ。

生者と死者が交錯し、植民地主義と民主主義が絡み合い、善悪正
邪が複雑に入り組んだ現実を前に、自殺未遂をすることによつて戦争
を生き残った復員兵の及川隆一が、呆然と立ち尽くしているという光
景。戦争を生き残った者として、「英霊」を弔うわけでもなく、戦犯を
裁く側に自己同一化できるわけでもない。また、一人の女性と真摯に
向き合うことさえできず、同じ復員兵の自殺に共感したり同情した
りすることもない。そんな及川隆一の姿を描いた飯田橋駅の場面は
は、安易に「戦争の悲惨」を告発したり、「平和」や「民主主義」を叫ん
だりする同時代の言説が抑圧しつゝあつた「戦後文学」の地声が、低く
重くかすかに聞こえている。また、「実存主義」や「身体論」のタームを
安易に引用しただけの、抽象的な物言いに終始する「崩解感覚」論で
は捉えられなかった（戦後文学）の地肌がさらけ出されている。「戦争

の悲惨」や「戦争の傷痕」を成り立たせているものは、過去に起きた戦
争そのものではない。靖国神社を直視することも、内なる戦争責任の
問題に向き合うことも、隣人の死に心を動かすこともできなくなつて
しまった（戦後）という時空の中で、そのつど生成される「記憶」こそが、
及川隆一の「戦争の傷痕」の正体である。トラウマは、生き残っていると
いう現実そのもの、生き残つてしまった自分の中に（汚れ）を感じる意
識そのもの、つまりは戦後そのものに由来する。

五、むすびにかえて―戦後文学の研究

昭和二十三年一月に出版された『時事年鑑』（時事通信社刊）に、
「文化―概観―思想界の一年」という記事が掲載されている。昭和二
十二年の思想界を回顧したその記事の中には、「天皇制と思想界」と
題された次のような文章がある。

天皇制そのものを、直接の主題とせず、シヤマニズムからの解放
や、君主崇拜や、絶対主義や、それらを一般的な形で論ずること
で、これまでの天皇観や国体観を批判するという行き方は、戦後第
二年の思想界の新しい特徴だ。政治的な討論の時期はすぎて、科学
的な考察が、日本人の自己反省を代弁する。丸山真男の『超国家
主義の論理と心理』や、高倉テルの『天皇制ならびに皇室の問題』
が、終戦一年の代表作だったとすれば、それからの一年間には、大
塚久雄、田中美知太郎、服部之総、林健太郎その他の人々が、それ
らの問題をむしろアカデミックな仕方であつた。

この記事だけから安易に判断することはできないだろうが、「一般的な形で論ずること：批判するという行き方」や「アカデミックな仕方」というところに「戦後第二年」にして思想界がすでに重心を移しているという指摘は興味深い。もちろんGHQによる検閲の問題もあり、事態は複雑だから、「アカデミックな仕方」と思想界が旋回して行ったのはなぜかという問題について、簡単に結論を下すことはできない。しかし、「崩解感覚」の研究も「実存主義」や「身体論」を援用した「アカデミックな仕方」に終始してきたのではないかと考えるとき、戦後の近代文学研究の言説がどのように成立し、展開してきたのかという問題に、もつと批判的なまなざしを向けるべきではないかという思いを禁じ得ない。作家のステートメントを援用すること、先行文献を徹底的に収集し参照すること、「周辺領域」の研究成果を活用することなど、それ自体を否定するわけではないが、テクストに向き合うという肝心の作業が等閑視されたまま「研究」が行われてしまうとしたら大いに問題である。しかもそうした研究が「作品論」とか「テクスト論」などと呼ばれるのだとしたら、事態はきわめてグロテスクだと言わざるを得ないではないか。多くの者が「崩解感覚」を論じてきたにもかかわらず、**「靖国神社」**が組上りのぼることもなく、「実存」や「身体」といったタームだけが氾濫してきたのはいったいなせか、とあえて問いかけてみたい。ことは「文学研究」の世界にとどまらず、(戦後)を対象化し清算するような言葉を獲得し得なかつた、「日本語」そのものの問題にも関わるように思えるからだ。

【注】

- (1) 小笠原克『鑑賞』崩解感覚』鑑賞 日本近代文学 第二四卷 野間宏・開高健『昭和五七年四月、角川書店』
- (2) 紅野謙介『蜘蛛』のいる街―野間宏『崩解感覚』試論』『国語と国文学』、平成元年五月
- (3) 杉浦明平『野間宏著『崩解感覚』について』『未来』、昭和二三年一二月)
- (4) 本多秋五『野間宏最初期の仕事』『物語戦後文学史』昭和四一年三月、新潮社
- (5) 『群像』一九九一年三月号の特集『追悼 野間宏』
- (6) 佐々木基一『おおきな穴があいた』『世界』一九九一年三月号の特集『追悼 野間宏氏』
- (7) 『四谷』(昭和二二年五月、日本地形社)
- (8) 井上章一『愛の空間』(平成一一年八月、角川書店)
- (9) これ以降の記述は、「東京都電案内図」(『東京郊外近県案内図』昭和二四年八月、交通案内社)による。

※ 本稿は、「浮遊する(身体)と語られない(場所)―野間宏『崩解感覚』論」(『文学と教育』第二十一集、平成三年六月)と、昭和文学会二〇周年記念秋季大会における口頭発表「戦後文学再考―野間宏『崩解感覚』をめぐって」(平成十一年十一月十四日、於・國學院大學)をもとに、大幅に手を加えて論文化したものである。

(のなか・じゅん)